

重点事項:学力の向上による進路保障		自己評価 (A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった)				学校関係者評価																																						
年度努力事項と具体的取り組み	主担当	成果	評価	課題	改善策等	自己評価の適切さ																																						
<b>授業力の向上</b>  1 教科内での連絡を密にし、授業シラバスを確立し、適切な教材の共有化を図る。  2 模擬試験の問題分析を行い、授業力の向上に努める。  3 7月と12月に授業評価を実施し、問題点を明確にし、授業の改善を行う。	1年	教科内での連絡を密にし、常に授業進度を確認している。また、教科ごとに生徒の個別指導を実施しており、生徒の学習状況を共有している。早期の小テストも実施しており、常に生徒の到達度を確認している。	B	教科内での連絡は取れているが、教科間の連携は希薄であるようだ。生徒に課す学習量(特に進課題)の共有化が必要である。  授業の中で基礎から発展的内容まで幅広く扱うため、授業進度が速くなってしまっており、理解できていない生徒も見受けられる。  ささまざまな進路の生徒が混在している中で、商業・国際経済科などでは、センター試験を受験しない生徒もいるため、一斉授業では対処が難しいケースもあった。  学年内で行われている模試分析を、今後は各教科内でも充実させる必要がある。  各担当ごとの分析はできているが、学年ごとの分析に時間がかかる。	学年会議を通じて、学習状況の共有化を図る。そのためには各教科の戦術および戦術を具体化し、ロングスパンの展望を明確にしながら、共通理解が必要である。  教科会議などを通じてさらに連携を図る。特に理科・数学は新教育課程1年目であり、試行錯誤しながら実践したことを伝えていく。  自分が直接受験するテストではなくても、その教科の学習として身につけべきものであるという意識を徹底させるとともに、一定の別プログラムも加えていった。	・授業力の向上に関する学校の自己評価結果はおおむね適切と考えられる。 ・本年度は、教科内での授業内容・進度の情報共有、年ごとの授業評価による授業PDCAの確立を特に意識した改善が行われたようである。生徒対象の学校評価アンケート(7月と12月の年度内比較)結果によると、授業満足度・授業理解度ともに高まりが見られ、学校の取り組みは一定の成果を上げていると思われる。 ・生徒の家庭学習状況について、学校アンケート(生徒)結果からは1・2年生の状況が低い水準にとどまっているように感じられる(設問内容の違いから単純比較はできないが、昨年度より落ち込んでいる可能性がある)。生徒の学習スタイル確立に向けた指導の確立(特に入学直後期)、家庭学習と連携した授業づくりの工夫などの改善を検討していくよとと考えられる。 ・教科間の連携についての同校の課題意識について、全国的にPC等を利用する仕事の様式等により教員間の関係が希薄しつつあるように感じられる。一人一人の子どものために日常的に語れる場を意識的につくってほしい。あるいは、定期的に行っている授業アンケート結果を活用した教員間のディスカッションをより活発にすることも考えられる。																																						
	2年	教科担当者内での連携をとり、授業で扱う内容や授業進度を確認している。小テストも共有し、分析することでその後の授業の進め方など改善をおこなっている。教科会等でも意見交換を行っている。	B																																									
	3年	教科の垣根を越えて、センター講習や二次対策に取り組むなど、学年全体で生徒の進路実現に向けて効果があるように授業の構築に工夫をこらした。	A																																									
	進路	各教科で模擬試験分析や入試問題分析を行った。(6教科平均値3.3)各学年の模擬試験毎に、他校比較や進年度比較を行い各学年で分析を行った。模試結果や入試結果については全職員で共有した。センター試験の結果についても分析を行い職員会議で説明した。	A																																									
学力向上	各学年各教科ごとに授業アンケートを取り、7月のアンケートではその後の授業に向けたの目標を設定し、12月のアンケートではその目標が達成できたかを検証した。	B																																										
<b>すべての生徒の学力の向上</b>  1 平成25年度新教育課程を円滑に実施するために、バランスの良い時間割を作成する。  2 朝学習の内容を精選し、基礎基本事項の定着を図り、補習や面談を通して、学力不振者へ丁寧な指導を行う。  3 専門科目の着実な定着を図るために学科や学年に応じた指導を行うとともに、全商主催検定1級の取得率の向上に努める。	教務	4月から仮の時間割で運用し、課題を見つけ、5月から確定した時間割で、運用した。教室をバランス良く配直し、単位数に応じた振り分けもおおむねよくできた。	B	同時開講科目などで一部バランスの悪い科目があった。  土曜補習はこれまで学年が学期ごとに決めてきた。その結果、部活動指導の予定を入れることができず、部活動指導に支障をきたした。  成績不振者の生徒は、授業中の集中力に問題がある生徒が多く、また家庭学習時間を確保できていないのが現状である。このような生徒に基礎学力の定着を図るためには、生活環境を整えることが必要である。  道目標が明確でなく、学習意欲が希薄な生徒もおり、土曜補習の際は理解できていない生徒も多かった。  入試講習の最終段階に入った時に、基礎事項の欠落がある生徒に対しては、対応がなかなか難しかった。  全体の1級取得率が昨年度45.1%から低下した。低下傾向は3年連続である。検定問題の難易度によるが、受験者が絞り込まれている検定ほど合格率が高く、全員受験を願っている検定の合格率は低迷する傾向が本年度も続いている。	・本年度は新教育課程の実施を評価項目に組み込んでいるが、進行過程において適切なチェック・改善がなされおむね円滑な移行ははかられた。 ・朝学習や補習については、学年・生徒の特性や状況に照らした戦略的な取組が行われたことがうかがえる。生徒・教員の学校アンケート結果からも、これらの取組に一定の手応えを感じてきていることがわかる。改善策で掲げた内容を着実に実施され、全ての生徒の基礎基本の定着、主体的に学習する習慣の確立につなげてほしい。 ・全体の検定1級取得率の低下傾向が続くことについては、学校としては強い課題意識を持っていることがわかる。この点、過去数年の学校評価では、全員履修科目(簿記等)の時数確保や内容の精選、教員の授業力量改善、生徒への意識付けと予復習定着等の改善策が掲げられてきたが、これらがどの程度実際に行われ進歩があったかがやや判断しづらい。検定試験の合格率の成果を評価上の指標に掲げると同時に、それに影響を与えうる取組についても評価内容に加えて、手段・成果の関連をより意識した取組を進める必要があるかもしれない。																																							
	進路	各学年ともきっちりと朝学習を行ってきた。土曜補習も昨年よりも回数が増え、土曜補習を通して学力不振者への指導を行うことができた。	B																																									
	1年	朝学習は毎日行っており、基礎学力の定着を図っている。また、早期の小テストを実施することにより、常に生徒の到達度を確認し、学力不振者においては放課後や考査前に個別指導を行っている。	B																																									
	2年	2学期より理科(文系は生物基礎、理系は化学も朝学習)に含めることにより、基礎的学習の理解を図った。土曜補習については、英数科をおこなったが、特に9月～10月・1月においては数学に限定して2時間実施するなど教科の特性や理解度に応じて実施した。担任との二者面談の中でも、特に学力不振生徒については、日々の学習時間記録に基づいて普段の生活から見直しをさせた。	B																																									
	3年	朝学習を12月まで続けて基礎を充実させ、一方で、6月からは放課後補習、土曜補習も実施。夏休みや冬休みにもさまざまな科目の補習を実施するなど、多様な入試形態にも対応できるようにプログラムを組んだ。	B																																									
	商国	<table border="1"> <tr> <td>&lt;検定試験名&gt;</td> <td>合格</td> <td>受験</td> <td>H25</td> <td>H24</td> </tr> <tr> <td>1級簿記実務検定</td> <td>72/106(67.9%)</td> <td>-</td> <td>78.7%</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1級ビジネス実務検定</td> <td>33/75(44.0%)</td> <td>-</td> <td>50.7%</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1級簿記実務検定試験</td> <td>42/99(42.4%)</td> <td>-</td> <td>47.9%</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1級英語検定試験</td> <td>69/179(38.5%)</td> <td>-</td> <td>38.1%</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1級情報処理検定試験</td> <td>64/197(32.5%)</td> <td>-</td> <td>28.0%</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1級会計実務検定試験</td> <td>2/18(11.1%)</td> <td>-</td> <td>27.3%</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>1級商業経済検定試験</td> <td>18/46(39.1%)</td> <td>-</td> <td>75.0%</td> <td>-</td> </tr> </table>	<検定試験名>		合格	受験	H25	H24	1級簿記実務検定	72/106(67.9%)	-	78.7%	-	1級ビジネス実務検定	33/75(44.0%)	-	50.7%	-	1級簿記実務検定試験	42/99(42.4%)	-	47.9%	-	1級英語検定試験	69/179(38.5%)	-	38.1%	-	1級情報処理検定試験	64/197(32.5%)	-	28.0%	-	1級会計実務検定試験	2/18(11.1%)	-	27.3%	-	1級商業経済検定試験	18/46(39.1%)	-	75.0%	-	C
	<検定試験名>	合格	受験		H25	H24																																						
1級簿記実務検定	72/106(67.9%)	-	78.7%	-																																								
1級ビジネス実務検定	33/75(44.0%)	-	50.7%	-																																								
1級簿記実務検定試験	42/99(42.4%)	-	47.9%	-																																								
1級英語検定試験	69/179(38.5%)	-	38.1%	-																																								
1級情報処理検定試験	64/197(32.5%)	-	28.0%	-																																								
1級会計実務検定試験	2/18(11.1%)	-	27.3%	-																																								
1級商業経済検定試験	18/46(39.1%)	-	75.0%	-																																								
41.1%																																												
<b>進路実績の向上</b>  1 第一志望校決定に際し、主任面談を実施し、進路実現に向けての意欲を高める。  2 実力考査結果を各教科、個々の生徒について検討し、『個人カルテ』を有効に利用した面談等を通じて、進路指導に生かす。  3 学年別に進路研修会を持ち、生徒の学習状況や大学入試情報を共有し、生徒の進路実績向上に努める。	2年	目標設定において迷いが生じている生徒との面談の中で普段の生活を見つめさせることにより、目標を現実的なものとし、進路実現への意欲を高めることができた。	B	第一志望校が1月下旬以降の提出になるため、現時点では第一志望校提出による主任面談を実施できていない。  今後、生徒が部活動に参加する時間を考慮しながら、第一志望校を提出できた生徒から順次主任面談を実施し、生徒全員の進路意識を高めていく。  第一志望校を書いた時から、成績の推移や本人の希望に変化があったため、結果的に第一志望校の通りにはいかない生徒もいた。  各学年でどのような情報が必要なのかを見極める事が必要であり、学年との連携をとりながら、進路研修会を持つことが重要である。  全体的に大学進学への意識が希薄であり、生徒自身が自ら課題意識・進路意識をもって行動するまでには至っていない。  新課程入試実施初年度であるため、情報の共有を常に必要とする。  センター後の国公立大学出願に関しては、各担当が自ら情報共有するほか、センター試験後には、各業者の説明の報告会、出願検討会などを進路指導部協力のもと、実施した。	・進路実績の向上については、進路実績は堅調に推移し保護者の満足度は高いものの、学校アンケートの関連項目の結果等を総合的に鑑み昨年度より厳しい自己評価結果としている。学校が立てた、第一志望校を活用した質の高い学習の実現、『個人カルテ』での情報共有による個別指導の充実といった目指す姿に適切と考えられるので、目指す姿に向けたきめ細やかな進路指導を充実させてほしい。 ・保護者の視点からは、生徒には、第一志望校は判断に迷ったり周りの生徒に流されて記入したりする傾向があると感じられる。第一志望校を提出したOBの意見などを生徒が簡単に参照できる仕組みがあるとよいと感じる(一年生の進路意識の希薄化の課題と重ね合わせると、一年生の時からそれが参照できるとよい)。																																							
	3年	担任や主任との面談を通して、生徒一人一人に適切な進路の選択をめざすとともに、学年集会などの機会には、チームとして入試に立ち向かう意識付けを行った。センター試験の際は、学年団が応援にかけつけ、勇気づけた。	B																																									
	進路	学年別に「新課程入試研修会」や「入試動向研修会」を持つことで、現状の入試状況と来年度以降の新課程入試に関する情報と対策を職員間で共有することができた。	B																																									
	1年	模試毎に教科の分析結果を学年で共有して、各教科の今後の展望や戦術・戦略を検討した。その後、各教科の指導や三者面談での指導に役立てた。	B																																									
	2年	年度当初に、新課程(理科・数学)についての研修会をおこない、大学の入試情報共有すると共に現年度生の状況について分析した。さらに、12月に第一志望校検討会を実施して、1人1人の状況と今後の進路について担任や教科担当者からの意見を踏まえ第一志望校について検討し、三者面談などで生徒へフィードバックした。	B																																									
	3年	各学期末ごとに、成績状況確認会を実施し、生徒ひとりひとりの状況を学年全体で共有するほか、センター試験後には、各業者の説明の報告会、出願検討会などを進路指導部協力のもと、実施した。	B																																									

重点事項:豊かな人間性を持った生徒の育成

自己評価(A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった)

学校関係者評価

年度努力事項と具体的取り組み		主担当	成果	評価	課題	改善策等	自己評価の適切さ	
規律ある態度の育成	1 生活3原則の徹底。特に、登校時の生徒の様子を把握し、心のこもった挨拶ができるように働きかける。	生徒指導	登校時の遅刻は、12月終了時で1日あたり0.39人であり、昨年より下回ったものの、目標であった年間遅刻者ゼロには及ばなかった。	B	A	遅刻はほとんどが常習者であり、長欠生徒が多く含まれている。担任を中心に個別指導を行っているが、指導が困難である。	規律ある態度の育成について自己評価結果をAとした学校側の判断は適切と考える。遅刻者数などが達成できなかった目標はあるものの、担当部門や学年で生徒指導上の課題、気になる事象を丁寧に把握しながら、生活3原則の徹底に向けた具体的な対応がはかられていると感じる。 ・小野高校生の部活や行事への取り組みはすばらしい。学校側が感じている部活動と学習の両立の課題や、郊外を含めた規律ある態度育成への課題(SNS利用など)については、教員間での取組を充実させるほか、保護者にも積極的に情報提供を行い学校・家庭の連携による取組を進めることも期待される。	
		1年	学年主任および副主任がほぼ毎日校門および昇降口に立ち、生徒の登校の様子を確認しながら生徒に向き合った。入学当初はごちぢなかった挨拶が、目を重ねることに心のこもった挨拶ができるようになってきた。また、担任全員が朝のホームルーム前に教室に入り、登校直後の生徒の様子を確認している。その結果、登校時の遅刻は年間10人以下であった。	A		登校時の様子を、学年主任と副主任は把握しているが、生徒個々の状況を担任に情報提供できていないのが課題である。また、早く登校する生徒の状況は把握できていない。		
		2年	SHRでの担任の話を各係からの呼びかけ・学年集会での生徒指導担当からの話などにより生活3原則を再認識させるとともに、清掃の指導や行事での時間厳守などにより徹底を図った。副主任が中心となって登校時の様子を把握し、朝氣づいた点については担任に伝え、指導に生かしている。	B		不登校傾向の生徒が、遅刻をすることがある。提出物などにおいて、提出期限が守られていない生徒も見受けられ、時間厳守がなされていない場合がある。		
		3年	豊上級生としての自覚をもたせるとともに、卒業後、立派な社会人として自立できるように、機会あるたびに各自の生活態度についての見直しを促した。	B		不登校傾向の生徒を中心に、一部、遅刻をする生徒がいた。		不登校傾向にある生徒とじっくり話をすることにより学習や進路に対する不安を和らげ、生活習慣の見直しを図ることができる。提出期限の守られていない生徒については、担任・教科担当者から注意喚起し、改めて時間厳守の大切さを知らせる。
	2 部活動の活性化を推進しながらも、効率的な練習計画により学習との両立を図る。	生徒指導	全校生の97%の生徒が部活動に所属し、学習と部活動の両立を目指し、日々熱心に取り組んでいる。	A		多くの生徒が両立できていないと感じており、時間の使い方に課題がある。		部顧問・担任・教科担当の連携を強化し、学習時間を確保できるよう努める。また、時間の「3点固定」など規律ある行動が取れるように指導したい。
	3 体育大会・コーラス大会などをとおして、クラスの一員としての意識を高めるとともに、学校行事を通じてクラスをまとめるリーダーを育成する。	1年	体育大会では、学年一丸となって取り組む仕組みができていた。特に、女子綱引き、長縄、着付け競技においては、上級生が有利である状況下において1位という成績を収めている。その中で、リーダーシップをとりながら集団を導く生徒が多数見られた。	A		リーダーが固定化されつつあり、他の生徒の積極的な行動が制限されてしまいがちである。		個々の生徒に班長などの責任ある仕事をさせるなど、学校行事だけでなく、学校生活全体を通じての取り組みが必要である。
		2年	体育大会でのクラス応援・コーラス大会の歌唱練習・修学旅行でのエイサー練習などクラス全員でおこなうことによりクラスの一体としての意識が高まり、一人一人の絆が深まった。また、体育大会での応援リーダー・コーラス大会での指揮者や伴奏者・修学旅行での旅行委員などの活動により、リーダーとしての自覚を持たせることができた。	A		クラスのリーダーが固定化されてしまうことがある。また、クラス全体での活動をやや苦手とする生徒が精一杯取り組む過程において、しんどくなってしまうことがある。		クラス全体のリーダーでなくても小単位の班長(修学旅行の研修班長や体育大会の着付けのリーダーなど)をすることにより、グループをまとめる経験を積ませる。
3年		最後の行事であるという意識から、生徒自ら、体育大会の準備に没頭し、よい行事にしようという意識がありあつた。リーダーシップも育ち、自然に互いに教え合っている姿も多々見られた。	A	体育大会を最後に学校行事がなくなってしまい、各自の受験勉強に入ってしまったことで、後半に入っては、クラスで団結する機会があまりなかった。	受験勉強も団体戦であるという意識をもたせるように、学年集会などの機会を有効に利用した。			
ボランティア体験の実	1 生徒会行事に積極的に参加し、学校周辺の清掃活動を実施することで、奉仕精神を高める。	生徒指導	6月と12月の年2回、クリーンキャンペーンを実施し、小野駅や商店街周辺の清掃活動を実施した。1回目は約200名、2回目も約200名の参加となり、有意義な活動となった。	A	A	参加生徒の大半が部活動を通じての参加であるが、部活動における年間行事として根付いてきた。今後は学校全体での取り組みが望まれる。	・ボランティア活動については、ここ数年安定した取組を続けている。こうした取組(さらに後に取り上げられている地域連携)にかかると「地域に貢献する小野高校生の精神」を意識化していく(それで全校生徒に広げていく)こともあってよいと考える。	
	2 寺子屋交流事業や老人ホーム訪問、実験観察教室など「高校生ふさと貢献活動」に積極的に取り組むことで、地域との連携を深める。	総務	野球場、吹奏楽部、家庭科研究部、天文部、ダンス部、商業科・国際経済科の生徒が地元商店街や老人クラブ、小学生・中学生などと交流を行い、いずれも有意義で充実した内容のものを行うことができた。	A		訪問先の状況や日程を考慮して、より充実した内容を指す必要がある。		小野市や小学校、地域団体との連絡を密にして早めに日程を調整し、内容を検討していく。
人権教育の充実	1 人権教育講演会、各学年の「生き方ホームルーム」を充実させる。	人権	竹中ナミ氏による「障害のある人と人権」をテーマにした人権教育講演会を実施し、チャレンジの就労支援の現状を中心に有意義な学習ができた。また、各学年の人権担当と専門部の連携を密にして班別研修を充実させ、学年毎の学習テーマに沿って活発な意見交換を行うことができた。	A	A	学校独自のアンケート調査の分析を綿密に行い、中学校での取組内容を掌握し、本校の各学年毎の学習計画に沿った企画・立案を行い、さらに内容の充実を図る。	アンケート集計に1年担当者に参加してもらい、各学年の担当者との連携を深めつつ、3年間を見据えた計画の立案を行う。	
	2 海外の人々との交流を通して、文化や価値観の多様性を認識させる。	国際理解	2度の海外留学生受入れ(9月:Brent校生徒、11月:タイ王国生徒)を通して、生徒や受入れ家庭の保護者が、文化や価値観の違いを認識した。同時に、自分たちの文化や考えを伝えるため、語学学習に対する関心も高まった。	A		放課後遅くまでホスト生徒を待っている留学生がいた。自転車通学のホスト生徒の中で、受入れ期間中の車で送迎が難しい場合があった。	ホストファミリー決定の際に、部活動や通学方法について慎重に検討する。	
	3 教育相談を充実させるとともに、カウンセリングマインド研修会を実施する。	保健	教育相談を実施し、カウンセラーからのアドバイスを受け、悩みや不安を抱えている生徒と保護者に対して問題解消の軽減ができた。また、研修により生徒理解が深まった。	B		対象生徒への周囲の生徒や教員の適切な対応が課題である。	教員や周囲の生徒がより理解者・支援者になるような取組を継続して研修し実施する必要がある。	

重点事項:地域に信頼される学校づくり

年度努力事項と具体的取り組み		主担当	自己評価(A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった)				学校関係者評価	
			成果	評価	課題	改善策等	自己評価の適切さ	
情報発信の手段と内容の充実	1 HP、学校公開、学校評価の充実と学校案内パンフレットを充実させる。	情報図書	図書通信・図書館報を定期的に発行し、図書館情報を周知し、読書への動機づけを図ることができた。HPにも掲載し、保護者や地域に対して情報発信することができた。	A	A	更に魅力的な情報発信を模索すること。	過去に発行したものを有効活用できないか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小野高校のホームページは基本情報や事業・教育活動にかかる情報を豊富に伝えており、サイト訪問者の属性に配慮した表示などページデザインに工夫が凝らされている。また学校案内や学校公開の内容の水準も高い。探求発表会についての自己評価をAとしたことは適切と考える。</li> <li>・学校アンケートからは、保護者のホームページへの満足度は総じて高いことがうかがえる。ただ、保護者が学校の教育活動の実際をどれだけ理解し協力意識を高めているかについては、本年度のアンケート結果(保護者向け)の整理方法からはややうかがいにくい。保護者アンケートにおける各項目での「わからない」比率にも何らかの注意が払われてよいと思う(そうした保護者の理解状況を助成した情報発信の工夫をはかることも検討の余地があろう)。</li> </ul>
		総務	学校案内パンフレットのデザインと内容を一新して、本校の魅力をより効果的に発信することができた。学校公開では、公開授業の内容一覧を作成したり、進学相談会を実施したりしたことでは好評を得た。オープンハイスクールでは、本校生徒との座談会の方法を工夫し、従来よりも大きな成果を得た。	A		時代や状況の変化に即応した柔軟な姿勢を持ち続けることである。	パンフレット作成は、もっと早い時期に業者を選定する。第1回オープンハイスクールでの座談会出席生徒の指導は、7月中に行う。	
		学校評価	情報図書部と密に連携を取り、分かりやすく、しかも学校の現況を伝える血の通った資料を作成し、発信に努めた。	A		多くの人にHPの学校評価に関する部分を閲覧してもらえるように分かりやすく、ビジュアルな資料を作成しなければならない。	項目のまとめかた、色彩の使い方等工夫をすることで、次年度にはより見やすくなりやすいものに改善してゆく。	
	情報図書	これまでの動画やDOCKメニューから一歩進めて、フラットデザイン及びレスポンスwebサイトの手法を取り入れたインパクトのあるホームページを作成した。	A	内容面での充実をはかる必要を感じる。		内容の精選と多くの情報発信のバランスがとれかつデザイン上優れたものを作りたい。		
	科学総合	地域の中学生や住民の方々に広く見学していただくために、土・日曜日に開催することが5月末に決定した。こちらの希望日時については小野エクラでの予約が既にっており、やむを得ず本校講義ホールでの開催になった。	D	次年度の早い時期に優先順位を土・日曜日に実施するの、エクラでの実施にするのかについて共通理解を図る。小野エクラで土・日に開催できることが最も望ましいが、小野エクラでの予約システム上、仮予約でもキャンセル料が発生することをきちんとおく必要がある。		次年度の早い段階でコース委員会を開催し、実施日の確定に努める。		
教職員意識の高揚	1 7月、12月に学校評価アンケートを実施し、PDCAサイクルを機動的に教育活動を活性化させる。	学校評価	年間2回のアンケートを実施し、PDCAサイクルを機能させて、本校の教育活動の発展に寄与することができた。	A	A	本年度はアンケート項目の精選を行ったので、より信頼性のあるアンケート結果となったので、数年間の比較検討ができるまで継続実施しなければならない。	アンケート結果の分析説明において、客観的な分析ができないようにしなれば、説明責任を果たしたことはならないので、次年度も質の高い分析へと発展させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の自己評価Aは適切と考える。7月と12月の生徒・教員アンケートを活用して、年度内で複数のPDCAサイクルを回す工夫をつくりあげてきた。また、学校評議員会での学年・担当の説明・質疑でも、根拠・ねらいを明確にして丁寧に取組を展開していることがうかがえた。今後、こうした学校・授業アンケート、学校評価の仕組みに即して教職員全体のPDCAの意識をさらに高めていくことを期待したい。</li> </ul>
	2 学期ごとに「生き方ホームルーム」の事前研修会を実施し、人権意識の向上を図る。	人権	各学年の人権担当と専門部との連携を密にして学年別の事前研修会を持ち、活発な意見交換を行うことができた。また、「ネット社会に潜む危険」の講演は多くの職員が参加を得て、意識の向上に繋がることができた。	A		各学年の人権担当者がスムーズに計画の立案ができるよう、もっと使いやすい資料の整理を行う。	年度末のまとめ・実践発表を踏まえ、各部署の連携をさらに強化して次年度の計画・立案を行う。	
	3 学年団だけでなく、部活動顧問や教科担当者との情報交換を密にし、生徒理解に努める。	1年	学年の96%の生徒が部活動に所属し、学習と部活動の両立を目指し、日々熱心に取り組んでいる。このような状況下で、成績不振の生徒に関しては、部活動顧問の理解を得ながら、土曜補習だけでなく放課後補習や早朝補習、また考査前の補習に参加させて学力を補った。	B		成績不振生徒のケアは丁寧に行っているが、実力の高いイレベルな生徒に対する成績向上の仕組みができていないことが課題である。	第一志望校を共有しながら、個々の生徒に対する学力向上のシステムを考える必要がある。補習は成績不振者だけでなく、アドバンスクラスを開講する等の取り組みを考えていきたい。	
	2年	学力不振者や普段の生活の中で不安定である生徒について、顧問との情報交換の中で部活動での活動状況を把握することにより生徒理解に努めた。また、教科担当者との情報交換の中で、学力不振者の状況を確認した。	B	学力不振生徒など気になる生徒の状況を確認することが多く、1人1人の生徒についてさらに情報交換を密にする必要がある。		部活動顧問や教科担当者との会議を通じて、部活動への参加姿勢や課題提出や授業での様子など教科への取り組み姿勢を確認し、生徒理解に努める。		
3年	教科の垣根を越えて、センター演習や二次対策に取り組むなど、学年全体で生徒の進路実現に向けて効果があるように授業の構築に工夫をこらした。	A		さまざまな進路の生徒が混在している中で、商業・国際経済科などでは、センター試験を受験しない生徒もいたため、一斉授業では対処が難しいケースもあった。	自分が直接受験するテストではなくても、その教科の学習として身につけるべきものであるという意識を徹底させるとともに、一定の別プログラムも加えていった。			
地域との連携	1 商業科・国際経済科全員と普通科希望者へのインターンシップをとおして、地域との連携を図る。	インターンシップ	商業・国際の生徒全員と普通科の生徒29名(昨年16名)が参加した。新たな事業所の開拓を行うとともに、地域の事業所との連携を図ることができた。普通科の希望者が年々増えてきたことは当初の目標を達成できた。今年から、インターンシップ後の礼状指導を加えるなど、より充実した指導を行った。	A	A	普通科生徒へのインターンシップ参加の呼びかけの結果、参加者が増加してきた。一方で、新たな事業所開拓や事前・事後指導の負担が増えた。	商業科を中心にインターンシップの指導の結果、商業科の負担がより大きくなってきた。今後はインターンシップ委員会の中で役割分担を決める必要がある。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域連携については、小野高校の学科編成を活かした分厚く充実した取組ができている。特にインターンシップが普通科生徒にも順調に波及し参加者の満足度も高い点は、学校の活性化の現れの一つとして評価したい。学校の自己評価は適切であり、検出された実務上の課題について改善を加えながら今後も安定的に実施していただきたい。</li> </ul>
	2 地元企業と連携した販売実習や専門科目の授業を利用した商品開発、地域の課題解決の調査研究活動を実施する。	商国	「英語業務」「中国理解」選択者が小野中学校・小野小学校で英語および中国語の模擬授業を実施。身につけた知識・技能を活用するとともに、言語活動を充実する機会となった。「ビジネス基礎」の授業において地元そば組合と連携し、幼児が使った玩具作りに取り組んだ。これまで身につけた知識・技能を商品開発に生かすことができた。「課題研究」は、さんふらわーFESと称して地元商店街の活性化や地元の小野まつりに参加して、商品販売などに取り組んだ。また、販売実習では、地元企業に協力をしていただき、商売の厳しさを学ぶ機会となった。	A		連携していただける小学校・中学校に対する理解や実施時期および内容の調整等のために担当者との連携を密にする必要がある。連携の地元そば組合との日程調整が難しい。イベントを企画運営するために様々な関係機関との調整等が必要である。	各学科の特徴を生かしながら、連携をさせていただける機関としっかりと趣旨説明等を行い、連携がスムーズにできるような体制を確立する。仕事が一部の教師に偏らない仕組み作りが必要であるととも、計画を立案する段階で、余裕を持った日程を決める必要がある。	
	3 サイエンスパートナーシップ事業で兵庫教育大学と高大連携を行うSPSP事業を実施。	科学総合	昨年度取り組みをさらに発展させて、次年度に履修する「探究1」へとつながる内容に深めることができた。	A		次年度でこの事業が4年目を迎える。ご指導をいただいている兵庫教育大学庭瀬教授との相談した結果、研究者が主に理論構築を得意とする方と実験を通じて理論を検証する方に大別されている現実を生徒に気づかせることが大切であるとの指摘をいただいたので、事業内容に取り組みたい。	従前の実験主体から、理論についての講義を受けてそれを理解し、実験で検証することで体験をさせる内容に変更する。	

学校関係者評価  
 <評価方法について>  
 ・小野高校では、過去数年間で学校評価の項目設定やシステムの運用方法に改善が施されており、学校改善につながる学校評価の形が作り上げられてきている。「血の通った」評価の運用に努めてきた学校の姿勢を評価したい。今後、学校アンケートや授業アンケートに基づく教育活動改善への教職員意識向上が一層はかられていくことが期待される。  
 ・評価項目の中には、評価結果の根拠・指標がわかりにくいものが若干見られるので、その点の改善が図られるとよい。  
 ・学校アンケート(生徒・生徒)が年二回行われることとあわせて、学校評価の各項目にかかる中間的な検証と年度内改善策の検討も行って(第二回学校評議員会の内容に含める)とよいと考えられる。  
 ・本年度、学校アンケートの内容修正が施され、よりわかりやすい内容となった。学校アンケートについては、学校評価の判断材料に活かすことはもちろんとして、項目を早期から生徒に見せるなどで意識付けさせていくことにも活用できると思われる。